

## 博士論文（要約）

論文題目 現代日本語の疑問文および質問表現に関する研究

氏名 林 淳子

# 目 次

## 序章

1 研究の背景.....	1
1.1 文の種類としての疑問文.....	1
1.2 日本語の疑問文規定の難しさ.....	3
2 研究の目的と方法.....	12
2.1 文の二面性.....	12
2.2 文に伴うニュアンス.....	15
2.3 史的観点.....	16
3 本論文の構成.....	17

## 第1章 疑問文・疑問表現研究史

1 本章の目的・構成.....	19
2 原理的研究.....	19
2.1 表現意図への注目.....	20
2.2 陳述論と疑問表現.....	23
2.3 陳述論の影響（1）山口堯二の疑問表現研究.....	24
2.4 陳述論の影響（2）モダリティ論における疑問表現の扱い.....	25
2.5 述体としての疑問文研究.....	28
2.6 近年の動向.....	29
2.7 今後の課題.....	30
3 構成要素研究.....	31
3.1 連体形終止.....	31
3.2 ム系述語.....	34
3.3 係助詞「ヤ」「カ」.....	36
3.4 「ノ」.....	39
3.5 終助詞「カ」.....	40
4 文型の研究.....	41
4.1 通時的研究.....	42

4.2	上代・中古.....	42
4.3	中世.....	43
4.4	近世.....	45
4.5	近代・現代.....	46
5	まとめ.....	47

## 第2章 言語行為的側面から見た疑問文の全体像（1）

### 一言語的反応の観点による疑問文の分類

1	相手に答えを求める表現.....	48
2	先行研究.....	49
2.1	仁田 1991a.....	49
2.2	山口 1990.....	50
3	本章の目的・方法・構成.....	50
3.1	目的.....	50
3.2	方法.....	51
3.3	構成.....	52
4	言語的反応の観点による疑問文の分類.....	52
4.1	要求と誘発.....	52
4.2	解答と応諾反応.....	54
4.3	説明誘発.....	55
4.4	同意表明期待.....	57
4.5	全体像.....	57
5	各タイプの疑問文の文型.....	59
6	言語的反応を期待する非疑問文.....	66
6.1	同意表明を期待する非疑問文.....	67
6.2	応諾反応を期待する非疑問文.....	68
7	疑問文規定の二段階性.....	69
8	まとめ.....	70

### 第3章 言語行為的側面から見た疑問文の全体像（2）

#### —終助詞付加による表現機能の変化—

1 疑問文に付加する終助詞〈ね〉〈な〉	72
2 本章の目的・方法・構成	73
2.1 目的	73
2.2 「ネ」と「ネエ」、「ナ」と「ナア」の区別	73
2.3 構成	74
3 終助詞付加の可否	74
4 終助詞付加による表現機能の変化	77
4.1 グループ（Ⅰ）—「ネ」と「ネエ」—	78
4.2 グループ（Ⅱ）①—〈ね〉（「ネ」「ネエ」）と〈な〉（「ナ」「ナア」）—	81
4.3 グループ（Ⅱ）②—〈ね〉（「ネ」「ネエ」）と〈な〉（「ナ」「ナア」）—	84
5 終助詞付加に見る疑問文の異質性	86
6 まとめ	87

### 第4章 解答要求疑問文（1）—有標の判定要求疑問文—

1 解答要求疑問文における「ノ」の有無	89
2 本章の目的・対象・構成	90
3 Yes/No ノ有り疑問文の表現の色合い	91
4 Yes/No ノ有り疑問文の一般構造	93
5 Yes/No ノ有り疑問文の運用	95
5.1 ノ有り疑問文とノ無し疑問文の違いの程度	95
5.2 スコープの「ノ」	96
6 平叙ノダ文との関係	97
7 承認抑止述法	99
7.1 準体句構成用法と承認抑止述法	99
7.2 疑問文における「ノ」のはたらき	101
8 まとめ	103

## 第5章 解答要求疑問文(2) —無標の判定要求疑問文—

1	ノ有り疑問文とノ無し疑問文の使い分け.....	106
2	先行研究.....	107
3	本章の目的・構成・調査対象.....	108
4	調査結果.....	108
5	ノ無し疑問文が好んで用いられる質問.....	110
5.1	(A)ケース $\beta$ に特有の質問.....	110
5.2	(B)ケース $\beta$ が多い質問.....	115
5.3	分析のまとめ.....	117
6	考察.....	117
6.1	判定要求疑問文の代弁性.....	117
6.2	代弁性の維持.....	118
7	「ノ」の有無から見える判定要求疑問文の構造.....	120
8	まとめ.....	122

## 第6章 解答要求疑問文(3) —不明項特定要求疑問文—

1	不明項特定要求疑問文と「ノ」の有無.....	124
2	調査結果の概要.....	127
3	( $\alpha$ ) ノ有り疑問文の方が安定するケース.....	129
3.1	4つの条件.....	129
3.2	了解内容の一部あるいは関係項目が不明な疑問文.....	135
4	( $\beta$ ) どちらも使えるが意味が異なるケース.....	139
4.1	違いのあり方.....	139
4.2	相手の内心をたずねる不明項特定要求疑問文.....	140
5	( $\gamma$ ) ノ無し疑問文の方が自然なケース.....	142
5.1	ノ無し疑問文が求められる場面.....	142
5.2	相手の意向・認識を引き出す不明項特定要求疑問文.....	143
6	まとめ.....	145
6.1	本章の結論.....	145
6.2	解答要求疑問文の構造.....	145

## 第7章 応諾反応要求疑問文（1）—意志をめぐる Yes/No 疑問文の2種—

1 応諾反応要求疑問文の文型.....	148
2 先行研究.....	151
2.1 疑いと問い.....	151
2.2 ショウ平叙文との対応.....	152
3 本章の目的・構成.....	153
4 ショウカ疑問文とスルカ疑問文の比較.....	154
4.1 表現領域.....	154
4.2 「カ」の必須性.....	154
5 質問文における「カ」の必須性.....	155
5.1 全体像.....	155
5.2 述語が「ショウ」「ダロウ」の場合.....	157
5.3 述語が「ショウ」「ダロウ」でない場合.....	158
6 疑問文における「カ」のはたらき.....	159
6.1 「カ」の意味.....	159
6.2 述語が「ショウ」「ダロウ」の場合.....	160
6.3 述語が「ショウ」「ダロウ」でない場合.....	163
7 ショウカ疑問文とスル（カ）疑問文.....	164
7.1 表現領域の違い.....	164
7.2 独言型質問文と対話型質問文.....	165
8 まとめ.....	166

## 第8章 応諾反応要求疑問文（2）—疑問文による応諾反応要求の成立—

1 史的観点の必要性.....	168
2 中古語.....	169
2.1 調査の方法と対象.....	169
2.2 文型.....	171
2.3 「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」.....	173
2.4 「…ムヤ」.....	175
2.5 中古語と現代語の比較.....	178

3	中世末期.....	180
3.1	調査の方法と対象.....	180
3.2	「一ウカ」.....	181
3.3	「一ウズルカ」.....	186
3.4	「一スルカ」.....	187
3.5	まとめ.....	190
4	近世前期上方語.....	191
4.1	調査の方法と対象.....	191
4.2	「一ウカ」.....	192
4.3	「一スルカ」.....	197
4.4	まとめ.....	199
5	近世後期上方語.....	199
5.1	調査の方法と対象.....	199
5.2	「一ウカ」.....	200
5.3	「一スルカ」.....	205
5.4	まとめ.....	208
6	近世後期江戸語.....	208
6.1	調査の方法と対象.....	208
6.2	「一ウカ」.....	209
6.3	「一スルカ」.....	214
6.4	まとめ.....	217
7	変化の方向.....	218
8	まとめ.....	222

## 第9章 応諾反応要求疑問文（3）

### —日本語の〈好まれる言い回し〉としての話し手の意志をめぐる疑問文—

1	本章の目的・構成.....	225
2	方法.....	226
3	調査結果.....	227
3.1	原文の主語が 1 人称単数の場合.....	227

3.2	原文の主語が 1 人称複数の場合.....	228
3.3	原文の主語が 2 人称の場合.....	230
3.4	全体の傾向.....	231
4	日本語の〈好まれる言い回し〉.....	232
5	まとめ.....	233

## 終章

1	結論.....	235
1.1	本論文の内容.....	235
1.2	現代日本語の疑問文規定.....	237
2	本研究の意義.....	238
2.1	日本語疑問文研究に対する貢献.....	238
2.2	新しい「話し手」像.....	239
2.3	構成要素の文法的性質.....	240
3	展望.....	242
3.1	本論文で扱わなかった文型.....	242
3.2	歴史語用論的展開.....	244
3.3	文の 4 分類再考.....	244
	参考文献一覧.....	246
	既発表論文との関係.....	261

## 本 文

五年以内に出版予定である。

## 参考文献一覧

- 青木惣一 1996 「『確信度』を用いた『のか』の語用論的分析」『アメリカ・カナダ大学連合  
日本研究センター』19
- 青木博史 2005 「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1-3
- 青木博史 2011 「述部における名詞節の構造と変化」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』  
くろしお出版
- 青木博史・鈴木泰・小柳智一 2016 「日本語文法学界の展望 4 歴史的研究」『日本語文法』  
16-1
- 東弘子 1992 「感情形容詞述語文における感情主の人称制限—叙述の立場から—」『日本語論  
究 3 現代日本語の研究』和泉書院
- 東弘子 1993 「統辞的特徴による感情形容詞の意味記述」『名古屋大学国語国文学』72
- 東弘子 1997 「日本語における人称とムードの一致」『南山国文論集』21
- 安達太郎 1989 「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』8-8
- 安達太郎 1992 「『傾き』を持つ疑問文—情報要求文から情報提供文へ—」『日本語教育』77
- 安達太郎 1995 「シナイカとシヨウとシヨウカ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の  
文法（上）単文編』くろしお出版
- 安達太郎 1999a 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 安達太郎 1999b 「意志のモダリティと周辺形式」『広島女子大國文』16
- 安達太郎 2002 「疑問文とモダリティの関係」『日本語学』21-2
- 安達太郎 2014 「疑問 1」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 安達隆一 1992 「係助詞『ゾ』の構文史—近代日本語構文の成立に関連して—」『神戸外大論叢』  
43-1
- 池上禎造 1952 「『はい』と『いいえ』」『国語国文』21-8
- 池上嘉彦 2000 『「日本語論」への招待』講談社
- 池上嘉彦 2011 「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」『人工  
知能学会誌』26-4
- 池上嘉彦・守屋三千代編 2009 『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて—』  
ひつじ書房
- 井島正博 1995 「疑問文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』30

- 井島正博 2011 「主節における非文末ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』7（東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室）
- 磯部佳宏 2000 「古代日本語の疑問表現（下）要判定疑問表現の場合」『山口大学文学会誌』50
- 磯部佳宏 2004 「古代日本語の疑問表現（上）要説明疑問表現の場合」『山口大学文学会誌』54
- 磯部佳宏 2009 「『延慶本平家物語』の疑問表現—『ニカ』『ニヤ』形式を中心に—」『山口国文』32
- 市川孝 1971 「疑問文」松村明編『日本文法大辞典』明治書院
- 井上優 1991 「受信情報の疑問文」『日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育の相互活性化」』津田日本語教育センター
- 井上優 1994 「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」『国立国語研究所報告 107 研究報告集 15』
- 井上優 2013a 「日本語と中国語における無標疑問文・有標疑問文の機能分担」『木村英樹教授還暦記念 中国語文法論叢』白帝社
- 井上優 2013b 『相席で黙っていられるか—日中言語行動比較論—』岩波書店
- 井上優 2015 「『話し手情報・聞き手情報』と文末形式—日本語と中国語の場合—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書（3）』
- 井上優 2016 「日本語と中国語の真偽疑問文と確認文の意味」『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版
- 今田滋子 1998 「日本語の疑問文末『か』のイントネーション再考：テレビ談話資料を中心に」『広島大学日本語教育学科紀要』8
- 植野貴志子 2011 「日英語会話における疑問表現の社会言語学的考察—英語コミュニケーション教育のために—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』17
- 大鹿薫久 1990 「疑問文の解釈」『語文』55
- 大鹿薫久 1991 「萬葉集における不定語と不定の疑問」『国語学』165
- 大鹿薫久 1993 「推量と『かもしれない』『にちがいない』—叙法の体系化をめざして—」『ことばとことのは』10
- 大鹿薫久 2004 「第8章 モダリティを文法史的に見る」尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店

- 大鹿薫久 2014 「詠嘆」 日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 大浜るい子 2004 「日本語の自然会話における真偽疑問文と応答詞『はい』の関係について」  
『日本語教育』123
- 岡崎正継 1996 『国語助詞論攷』おうふう
- 岡部嘉幸 1995 「『のですか』 質問文の表現性一体言化の機能という観点からの分類の試み  
—」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院
- 岡本真一郎・多門靖容 2014 「他者内心表現における人称制限の解除」『日本語文法』14-2
- 小川栄一 1987 「疑問文が連体形に終止することの意義」『福井大学教育学部紀要 第I部  
人文科学（国語学・国文学・中国学編）』36
- 小川栄一 1988 「連体形終止表現の本質—前提の提示—」『国語国文学』27（福井大学）
- 小川栄一 1989 「係結びと焦点」『福井大学教育学部紀要 第I部 人文科学（国語学・国文学  
学・中国学編）』37
- 小川栄一 1993 「情報構造としての係結び」『国語国文学』32（福井大学国語学会）
- 小田勝 2007 『古代日本語文法』おうふう
- 小田勝 2015 『実例詳解古典文法総覧』おうふう
- 小野葉子 1998 「『春色梅児誉美』の疑問表現—「問いかけ」と「疑い」の形式の交渉—」『青山  
山語文』28
- 尾上圭介 1975 「呼びかけの実現—言表の対他的意志の分類—」『国語と国文学』52-12
- 尾上圭介 1982 「文の基本構成・史的展開」『講座日本語学 2』明治書院
- 尾上圭介 1983 「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 尾上圭介 1990 「文法論—陳述論の誕生と終焉—」『国語と国文学』67-5
- 尾上圭介 2001 『文法と意味 I』くろしお出版
- 尾上圭介 2002 「係助詞の二種」『国語と国文学』79-8
- 尾上圭介 2006 「存在承認と希求—主語述語発生の原理—」『国語と国文学』83-10
- 尾上圭介 2012 「不変化助動詞とは何か—叙法論と主観表現要素論の分岐点—」『国語と国文学  
学』89-3
- 尾上圭介 2014a 「文1」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 尾上圭介 2014b 「文の種類1」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 沢瀉久孝 1941 「『か』より『や』への推移」『万葉集の作品と時代』岩波書店
- 紙谷栄治 2000 「中世における疑問表現について」『国文学』80（関西大学）

- 川上徳明 2005『命令・勧誘表現の体系的研究』おうふう
- 川岸克己 1993「係助詞ヤ・カにおける対他性について」『学習院大学国語国文学会誌』
- 川端善明 1963「喚体と述体—係助詞と助動詞とその層—」『女子大文学』15
- 川端善明 1965「喚体と述体の交渉—希望表現における述語の層について—」『国語学』63
- 川端善明 1979『活用の研究Ⅱ』大修館書店
- 川端善明 1997『活用の研究Ⅱ 増補再版』清文堂
- 川村大 2014「マシ」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 衣畑智秀 2014a「上代から中世の疑問文の様相—データ解釈を中心に—」『福岡大学人文論叢』46-1
- 衣畑智秀 2014b「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」『日本語文法史研究 2』ひつじ書房
- 衣畑智秀 2016「係り結びと不定構文—宮古語を中心に—」『日本語の研究』12-1
- 衣畑智秀・岩田美穂 2010「名詞句位置のカの歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』6-4
- 木下書子 1989「疑問・反語の副詞による連体形止めの構文的職能に関する一考察」『国語国文学研究』25（熊本大学）
- 木下正俊 1978「『斯くや嘆かむ』という語法」『萬葉集研究』7
- 金水敏 1989「『報告』についての覚書」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 金水敏 1990「述語の意味層と叙述の立場」『女子大文学 国文篇』41（大阪女子大学国文学科）
- 金水敏 1992「談話管理理論からみた『だろ』」『神戸大学文学部紀要』19
- 金水敏 2006『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 金水敏 2011「第3章 統語論」金水敏・大鹿薫久・高山善行編『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店
- 金水敏 2012a「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」『近代語研究』16
- 金水敏 2012b「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」『国語と国文学』89-11
- 金水敏 2012c「日本語の疑問詞疑問文と「の」の有無」『語文』99
- 金水敏 2014a「フィクションの話し言葉について—役割語を中心に—」『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房
- 金水敏 2014b「疑問文の意味と構造—選言形式との関係から間接疑問文の意味と構造を考

- える一」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』研究発表会資料
- 金水敏 2015a 「日本語の疑問文の歴史素描」『国語研プロジェクトレビュー』5-3
- 金水敏 2015b 「歴史から見た現代共通語の疑問標識分布」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』研究発表会資料
- 金水敏・高田博行・椎名美智 2014 『歴史語用論の世界—文法化・待遇表現・発話行為—』ひつじ書房
- 金田一春彦 1953a 「不変化助動詞の本質（上）—主観的表現と客観的表現の別について—」『国語国文』22-1
- 金田一春彦 1953b 「不変化助動詞の本質（下）—主観的表現と客観的表現の別について—」『国語国文』22-3
- 久島茂 1989 「連体形終止法の意味するもの—係り結びの意味構造とその崩壊—」『静大国文』34
- 工藤聡子 2006 「疑問文の終助詞『か』の付加と省略に関して—語用論的観点から—」『日本語用論学会大会研究発表論文集』2
- 久野暉 1983 『新日本文法研究』大修館書店
- 熊野七絵 1997 「広島方言の文末の『かね』に関する研究」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』43-2
- 熊野七絵 1998 「言語変化の過程として見た『ね』と『な』」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』44-2
- 熊野七絵 1999 「文末の『かね』の意味・機能—『疑いの表現』としての位置づけ—」『広島大学留学生センター紀要』10
- 倉本幸彦 2011 「『表現類型論』における『第四の表現』についての考察—『疑問文』からみた『返答要請表現』の位置づけ—」『待遇コミュニケーション研究』8
- 栗田岳 2011 「『しづ心なく花のちるらむ』—ム系助動詞と『設想』—」『日本語の研究』7-1
- 小出祥子 2012 「上代における終助詞カの意味変化とカ文の構造変化」『名古屋大学国語国文学』105
- 国立国語研究所 1960 『国立国語研究所報告 18 話しことばの文型（1）—対話資料による研究—』
- 国立国語研究所 1963 『国立国語研究所報告 23 話しことばの文型（2）—独話資料による研究—』

- 古座暁子 1984 「たずねる文」『教育国語』 79
- 古座暁子 1987 「本来のたずねる文」『教育国語』 91
- 古座暁子 1989 「～か、～のか—会話文における場合—」『教育国語』 97
- 此島正年 1972 「露や何なり」『国学院雑誌』 73-11
- 此島正年 1973 『国語助詞の研究 助詞史素描』 桜楓社
- 小林千草 2009 「〔書評〕『天草版『平家物語』の原拠本、および語彙・語法の研究』」『日本語の研究』 5-4
- 小林ミナ 1993 「疑問文と質問に関する語用論的考察」『言語研究』 104
- 小柳智一 2013 「言語変化の段階と要因」『学芸国語国文学』 45
- 小柳智一 2014 「奈良時代の配慮表現」野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』くろしお出版
- 近藤安月子・姫野伴子編 2012 『日本語文法の論点 43—「日本語らしさ」のナゾが氷解する—』 研究社
- 近藤泰弘 1987 「古文における疑問表現—『や』と『か』—」『国文法講座 3 古典解釈と文法—助詞の機能』 明治書院
- 近藤泰弘 2000 『日本語記述文法の理論』 ひつじ書房
- 近藤要司 1989 「上代から中古にかけての疑問表現形式の変遷—万葉集、古今和歌集の助詞ヤの用法について—」『古今集連環』 和泉書院
- 近藤要司 1990 「上代における助詞カ（モ）について—文中カ（モ）の指示しているものは何か—」『四国女子大学紀要』 10-1
- 近藤要司 1998 「『源氏物語』の助詞カの文末用法について」『金蘭短期大学研究誌』 29
- 近藤要司 1999 「『源氏物語』の助詞カの不定語下接用法について」『親和国文』 34
- 近藤要司 2002 「『今昔物語集』の文末カの用法について」『親和国文』 37
- 近藤要司 2003 「助詞ヤの文中用法の変遷—『源氏物語』と『今昔物語集』の比較—」『親和国文』 38
- 近藤要司 2004 「文末カモの詠嘆用法について」『親和国文』 39
- 近藤要司 2012 「『万葉集』の～ムカについて」『日本語文法史研究 1』 ひつじ書房
- 佐伯梅友 1938 「萬葉集の助詞二種—「の」「が」及び「や」「か」について—」『万葉語研究』 文学社
- 佐伯梅友 1961 「係りか、言い切りか。—「か」の場合—」『武蔵野文学』 8

- 佐伯哲夫 1993 「ウとダロウの職能分化史」『国語学』 174
- 阪倉篤義 1954 「『対話』—戯曲のことば—」『国語国文』 23-11
- 阪倉篤義 1956 「石をたれ見き」『解釈と鑑賞』 21-10
- 阪倉篤義 1957 「反語について」『万葉』 22
- 阪倉篤義 1958 「上代の疑問表現から」『国語国文』 27-11
- 阪倉篤義 1960 「文法史について—疑問表現の変遷を一例として—」『国語と国文学』 37-10
- 阪倉篤義 1970 「『開いた表現』から『閉じた表現』へ」『国語と国文学』 47-10
- 阪倉篤義 1993 『日本語表現の流れ』岩波書店
- 坂本あかり 1998 「会話中に現れる応答表現についての一考察: Yes-No 疑問文への応答」『国語国文論集』 27 (学習院女子短期大学)
- 佐久間鼎 1940 「終止助詞『か』と発問の態度」『現代日本語法の研究』厚生閣
- 定延利之 2008 『煩惱の文法—体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話—』筑摩書房
- 定延利之 2016a 『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房
- 定延利之 2016b 『煩惱の文法 増補版』凡人社
- 佐藤宣男 1976 「文末用法におけるカとヤ—『宇津保物語』を中心として—」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論叢』
- 佐藤順彦 2009 「前期上方語のノデアロウ・モノデアロウ・デアロウ」『日本語文法』 9-1
- 佐藤順彦 2011 「後期上方語におけるノデアロウの発達」『日本語文法』 11-1
- 沢田美代子 1960 「助詞カ・ヤの歴史的変遷」『大坂府立大学紀要』 8
- 篠崎晃一 2015 「第 15 章 現代の方言」月本雅幸編『日本語概説』放送大学教育振興会
- 篠田裕 2006 「終助詞『な』と『ね』の認識的意味」『徳島文理大学 比較文化研究所年報』 22
- 篠田裕 2007 「終助詞『な』の意味再考—話し手の『いま・ここ』における主観的判断の標識として—」『徳島文理大学 比較文化研究所年報』 23
- 志波彩子 2015 「日本語の間接疑問構文の発達をめぐって—近代から現代へ—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』第 6 回研究発表会資料
- 柴谷方良 2014a 「関係節再考」東京外国語大学講演会 (2014 年 11 月 7 日)
- 柴谷方良 2014 b 「準体助詞をめぐる諸問題—共時論ならびに通時論的観点から—」『日本語学会第一四九回大会予稿集』

- 清水登 1994 「疑問表現について—院政期から室町期まで—」 『長野県短期大学紀要』 49
- 清水登 1995 「疑問表現について—院政期から室町期までの表現と主格助詞の用法をめぐって—」 『長野県短期大学紀要』 50
- 荘司育子 1992 「疑問表現における文末の「ノ」」 『STUDIUM』 20
- 鈴木英夫 1988 「終助詞についての構文論的研究—問いかけと省略を中心にして—」 『国語と国文学』 65-3
- 鈴木雅光 2004 「yes-no 疑問文の応答について」 『東洋大学大学院紀要』 41
- 鈴木雅光 2006 「依頼の疑問文」 『東洋大学大学院紀要』 43
- 鈴木睦 1989 「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」 『日本語学』 8-2
- 鈴木睦 1997 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」 田窪行則編『視点と言語行動』 くろしお出版
- 鈴木義和 1989 「『しづ心なく花のちるらむ』型の文について」 『古今和歌集連環』
- スワン彰子 1998 「疑問文と疑問を表わす『か』の関係」 『講座日本語教育』 第33分冊
- 高瀬正一 1989 「疑問詞による係り結びについて—『源氏物語』を資料として—」 『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子 2011 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する—』 大修館書店
- 高梨信乃 2010 『評価のモダリティ—現代日本語における記述的研究—』 くろしお出版
- 高橋麻美子 1980 「和歌に於ける『—や何なり』」 『叙説』
- 高橋淑郎 1999 「『自問自答形式の疑問表現』の性格」 『早稲田大学日本語教育学科紀要』 9
- 高宮幸乃 2002 「明恵上人関係講説聞書書類における『問…答…』という文章形式と疑問文の表現形式との関係」 『三重大学日本語学文学』 13
- 高宮幸乃 2003 「現代日本語の間接疑問文とその周辺」 『三重大学日本語学文学』 14
- 高宮幸乃 2004 「ヤラ（ウ）による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」 『三重大学日本語学文学』 15
- 高宮幸乃 2005 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」 『三重大学日本語学文学』 16
- 高山善行 1986 「〈推定表現〉と〈質問表現〉の交渉」 『待兼山論集 文学篇』 20
- 高山善行 2002 『日本語モダリティの史的研究』 ひつじ書房
- 高山善行 2014 「疑問文とモダリティの関係をどう捉えるか」 『日本語疑問文の通時的・対照

言語学的研究』研究発表会資料

高山善行 2016「中古語における疑問文とモダリティ形式の関係」『国語と国文学』93-5

田窪行則 1990「対話における知識管理について—対話モデルからみた日本語の特性—」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂

田窪行則・金水敏 1996「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3

竹村明日香 2016「疑問詞疑問文と終助詞ゾ—中世以降のゾの脱落を中心に—」『国立国語研究所共同研究日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書(3)』

竹村明日香・金水敏 2014「中世日本語資料の疑問文—疑問詞疑問文と文末助詞との相関—」『国立国語研究所共同研究日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書(1)』

多田知子 1989「『の一らむ』文型について」『古今和歌集連環』

橘豊 1971「疑問表現」松村明編『日本文法大辞典』明治書院

田中章夫 1956「近代東京語質問表現における終止形式の考察—その通時的展開について—」『国語学』25

田中健子 1956「疑問表現形式の史的変遷—会話文を中心として—」『文学・語学』1

田中敏生 1985「万葉集におけるヤ・カの上接語句について—ム述語文のばあいを中心に—」『国文論叢』12

田野村忠温 1988「否定疑問文小考」『国語学』152

田野村忠温 1990『現代日本語の文法 I —「のだ」の意味と用法—』和泉書院

田野村忠温 1991「疑問文における肯定と否定」『国語学』164

田野村忠温 2014「ノダ 1」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店

張雅智 2009「現代日本語における疑問文の「傾き」—肯定・否定疑問文の機能を通して—」『文化』72-3/4

土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁 1990a「日本語の意味論をもとめて 4 日本語に疑問文はない」『言語』19-4

土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁 1990b「日本語の意味論をもとめて 5 選択・疑問・詠嘆・存在の『か』」『言語』19-5

土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁 1990c「日本語の意味論をもとめて 6 『あっ、そうか』の意味論」『言語』19-6

土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁・今仁生美 1990「日本語の意味論をもとめて 8 『誰』とは誰か」『言語』19-8

- 鶴橋俊宏 2013『近世語推量表現の研究』清文堂
- 土岐留美江 2010『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房
- 土岐留美江 2014「動詞基本形終止文の表す意味」『日本語文法』14-2
- 時枝誠記 1941『国語学原論』岩波書店
- 徳永辰通 2009「存在疑問文の変遷—疑問形式と存在確認対象と助詞—」『解釈』55-11、12
- 徳永辰通 2010『「～ヤ—連体形」から終助詞カへの交替—天草版『平家物語』に見る交替の諸相—』『人文学部研究論集』23（中部大学）
- 友定賢治 1977「現代語の通時的考察—質問表現の文末形式について—」『文教国文学』7（広島女子大学）
- 外山映次 1957「質問表現における文末助詞ゾについて—近世初期京阪語を資料として—」『国語学』31
- 中右実 1984「質疑応答の発想と論理」『日本語学』3-4
- 中島悦子 1999「第3章 疑問表現の諸相」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 中島悦子 2002「第3章 職場の男性の疑問表現」現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- 永瀬富子 1967「室町時代の疑問表現—助詞を中心として—」『言語と文芸』54、pp.44-53
- 永田里美 2000「勧誘表現『～マイカ』の衰退—狂言台本を資料として—」『筑波日本語研究』5
- 永田里美 2002「狂言台本虎明本における否定疑問文『動詞+ヌカ』—行為要求表現という観点から—」『筑波日本語研究』7
- 永田里美 2003「否定疑問文による行為要求表現の史的变化—『～マイカ』から『～ヌカ／ナイカ』へ—」『筑波日本語研究』8
- 中田清一 1984「疑問文のシンタックスと意味」『日本語学』3-8
- 中手惇 1969「ロドリゲス『日本大文典』における疑問表現と仮定表現—特に推量表現を含む場合—」『愛知大学文学論叢』37
- 中西宇一 1969『「べし」の推定性—様相と推定と意志—』『萬葉』71
- 中野伸彦 1991「江戸語における終助詞の男女差—女性による「な」の使用について—」『国語と国文学』68-4
- 中野伸彦 1993a「江戸語の疑問表現に関する一つの問題—終助詞「な」「ね」が下接する場

- 合の自問系の疑問文の形式一』『近代語研究』9
- 中野伸彦 1993b 「終助詞の男女差の形成—江戸語における男女差形成の動き—」『山口大学教育学部研究論叢 第一部 人文科学・社会科学』43
- 中野伸彦 1996 「確認要求の平叙文と終助詞『ね』—江戸語と現代語—」『山口明徳教授還暦記念 国語学論集』
- 中村通夫 1948 「東京語における意志形と推量形」『東京語の性格』川田書房
- 名嶋義直 2007 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版
- 西尾寅弥 1972 『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 仁科明 2014 「「無色性」と「無標性」—万葉集運動動詞の基本形終止、再考—」『日本語文法』14-2
- 仁田義雄 1979 「文法記述と語用論・その一つの出会い—『問い』と『答え』の文をめぐる一、二の考察から—」『文芸研究』92
- 仁田義雄 1987 「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界 小泉保教授還暦記念論文集』大学書林
- 仁田義雄 1989a 「『行こうか戻ろうか』—意志表現の疑問化—をめぐる」『日本語学』8-8
- 仁田義雄 1989b 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 仁田義雄 1991a 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄 1991b 「意志の表現と聞き手存在」『国語学』165
- 仁田義雄 2016 『文と事態類型を中心に』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 2003 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 根来司 1976 「第二 中古語その後」『中世文語の研究』笠間書院
- 野田春美 1997 『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 野田尚史 2015 「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」『日本語文法』15-2
- 野田尚史・高山善行・小林隆編 2014 『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』くろしお出版
- 野村剛史 1993 「上代語のノとガについて（上）」『国語国文』62-2
- 野村剛史 1995 「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9
- 野村剛史 1997 「三代集ラムの構文法」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 野村剛史 2001a 「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-1

- 野村剛史 2001b 「か」 山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』明治書院
- 野村剛史 2002 「連体形による係り結びの展開」『シリーズ言語科学5 日本語学と言語教育』東京大学出版会
- 野村剛史 2005 「中古係り結びの変容」『国語と国文学』82-11
- 野村剛史 2011 『話し言葉の日本史』吉川弘文館
- 野村剛史 2014 「ム」 日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店
- 芳賀綏 1954 「“陳述” とは何もの？」『国語国文』23-4
- 橋本修 1993 「疑問形＋終助詞『ね』の表わす意味の類型」『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』
- 蓮沼昭子 1995 「対話における確認行為『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版
- 長谷川明香 2015 「文のタイプ」 齊藤純男・田口善久・西村義樹編『明解言語学辞典』三省堂
- 服部匡 1992 「現代語における『～か』のある種の用法について」『徳島大学国語国文学』5
- 服部匡 2007 「現代語における『～か』のある種の用法について（補遺）」『同志社女子大学日本語日本文学』19
- 濱千代いづみ 2012 「古活字本『伊曾保物語』の疑問詞疑問文」『解釈』58-11、12
- 濱千代いづみ 2013 「古活字本『伊曾保物語』の肯否疑問文」『岐阜聖徳学園大学紀要 教育学部編』52
- 林四郎 1960 『基本文型の研究』明治図書出版
- 原口裕 1973 「江戸語の推量形」『静岡女子大学国文』6
- 半藤英明 2011 「疑問文は判断文か」『解釈』57-11、12
- 樋口文彦 1992 「勧誘文—しよう、しまし—」『ことばの科学』5 むぎ書房
- 藤原浩史 2014 「平安・鎌倉時代の依頼・禁止表現に見られる配慮表現」野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』くろしお出版
- 船城俊太郎 1973 「疑問詞疑問文は連体形で終止する」『言語と文芸』76
- 古本裕子 1993 「疑問表現における問いかけの機能について」『ことばの科学』5
- 堀尾香代子 2000 「上代語における係助詞『や』『か』」『表現研究』72
- 堀尾香代子 2005 「カからヤへの移行過程における初期段階の様相」『表現研究』81

- 堀尾香代子 2012 「上代語における係助詞カの振る舞い：係助詞ヤとの比較」『北九州市立大学文学部紀要』 81
- 堀尾香代子 2013 「上代語ヤの係り結びの異型」『北九州市立大学文学部紀要』 82
- 堀崎葉子 1995 「江戸語の疑問表現体系について—終助詞カシラの原型を含む疑い表現を中心に—」『青山語文』 25
- 馬穎瑞 2014 「疑問文の文末表現の使用に関する一考察」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』 14
- 前田さとみ 1992 「EST-CE QUE 型・倒置型疑問文の表現価値について—シナリオによる現状調査—」『フランス語・フランス文学論集』 7 (筑波大学)
- 牧原功 1995 「疑問表現における『の』の機能の一側面—前提との関わりを中心に—」『日本語と日本文学』 21 (筑波大学国語国文学会)
- 益岡隆志 1987 「表現類型のモダリティと疑問文の性格づけ」『神戸外大論叢』 38-5
- 益岡隆志 1989 「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 益岡隆志 1992a 「不定性のレベル」『日本語教育』 77
- 益岡隆志 1992b 「表現の主観性と視点」『日本語学』 11-9
- 益岡隆志 1997 「表現の主観性」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版
- 益岡隆志 2007 『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 1992 「第7章 疑問と否定の表現」『基礎日本語文法—改訂版—』
- 増田将伸 2005 「対話における質問表現の機能に関する予備的検討」『言語・音声理解と対話処理研究会』 44
- 松村明 1998 『増補江戸語東京語の研究』東京堂出版
- 三上章 1955 「疑問文の形式—疑問のファイナル—」『現代語法新説』
- 南不二男 1985 「質問文の構造」『朝倉日本語新講座7』朝倉書店
- 三宅知宏 2011 『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 三宅尚子 1985 「不定語を含む疑問表現の類型—上代・中古の和歌に於いて—」『国文学研究ノート』 18
- 宮崎和人 2005 『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』ひつじ書房
- 宮崎和人 2009 「談話における意志の形成」『岡山大学文学部紀要』 52
- 宮地朝子・北村雅則・加藤淳・石川美紀子・加藤良徳・東弘子 2007 「共在性からみた『で

- す・ます』の諸機能』『自然言語処理』14-3
- 宮地裕 1951 「疑問表現をめぐって」『国語国文』20-7
- 宮地裕 1954 「いわゆる『文の性質上の種類』の原理とその発展」『国語国文』23-11
- 宮地裕 1958 「文と表現文」『国語国文』27-5
- 宮地裕 1963 「表現意図」『国立国語研究所報告 23 話しことばの文型（2）—独話資料による研究—』
- 宮地裕 1979 『新版文論』明治書院
- 森勇太 2014 「行為指示表現としての否定疑問形の歴史—上方・関西と江戸・東京の対照から—」『日本語文法史研究 2』ひつじ書房
- 森勇太 2016 『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』ひつじ書房
- 森重敏 1959 『日本文法通論』風間書房
- 森重敏 1966 「『か』より『や』への推移続貂」『沢瀉博士喜寿記念万葉学論叢』
- 森山卓郎 1989a 「内容判断の一貫性の法則」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 森山卓郎 1989b 「コミュニケーションにおける聞き手情報—聞き手情報配慮非配慮の理論—」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 森山卓郎 1989c 「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 1 日本語学要説』明治書院
- 森山卓郎 1992a 「日本語における『推量』をめぐって」『言語研究』101
- 森山卓郎 1992b 「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59
- 矢島正浩 1997 「疑問詞疑問文における終助詞ゾの脱落—近世前・中期の狂言台本を資料として—」『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 矢島正浩 1999 「一八世紀初頭上方文献における意志・推量の助動詞の諸形式の用法」『国語国文学報』57（愛知教育大学国語国文学研究室）
- 矢島正浩 1999 「意志・推量の助動詞の用法からみた近松世話浄瑠璃の文体」佐藤武義編『語彙・語法の新研究』明治書院
- 矢島正浩 2016 「否定疑問文の検討を通じて考える近世語文法史研究」大木一夫・多門靖容編『日本語史叙述の方法』ひつじ書房
- 柳田征司 1985 『室町時代の国語』東京堂出版
- 柳田征司 1993 「無名詞体言句から準体助詞体言句（『白く咲けるを』から『白く咲いているのを』）への変化」『愛媛大学教育学部紀要 第Ⅱ部 人文・社会科学』25-2

- 柳田征司 1993 「『の』の展開、古代語から近代語への」『日本語学』12-10
- 八幡章雄 2005 「室町末期における疑問助詞カの性格」『名古屋大学国語国文学』97
- 山内洋一郎 2003 『活用と活用形の通時的研究』清文堂
- 山口堯二 1968 「「まし」の意味領域」『国語国文』37-5
- 山口堯二 1990 『日本語疑問表現通史』明治書院
- 山口堯二 1991 「推量体系の史的変容」『国語学』165
- 山口堯二 2000 「中世末期口語における『べし』の後身—『天草版平家物語』の訳語による—」『文学部論集』84（佛教大学）
- 山田潔 1972 「推量の助動詞『う』『うず』『うずる』の一考察—キリシタン資料における実態—」『学芸国語国文学』7
- 山田昌裕 2005 「疑問表現における主格表示「ガ」拡大の様相—係助詞「ヤ」「カ」との関わり—」『国語と国文学』82-11
- 山田孝雄 1908 『日本文法論』宝文館
- 山本淳 1995 「近世における疑問表現の形態について：上方語におけるものと江戸語におけるものと」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』22
- 吉田茂晃 1988 「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15
- 吉田茂晃 1994a 「疑問文の諸類型とその実現形式—ノデスカ／マスカ型疑問文の用法をめぐって—」『島大国文』22
- 吉田茂晃 1994b 「現状拒否性擬似疑問文—「かうしもとり集めて肝を砕くこと多からむ」（『蜻蛉日記』中巻）—」『解釈』40-7
- 吉田茂晃 2000 「〈ノダ〉の表現内容と語性について—〈ノダ〉は『説明の助動詞』か—」『山邊道』44
- 吉田茂晃 2001 「文末用言の活用形について」『山邊道』45
- 吉田茂晃 2005 「“結び”の活用形について」『国語と国文学』82-11
- 吉田茂晃 2009 「係助詞の分類と文末活用形との呼応関係」『山邊道』52
- 吉田茂晃 2014 「ノダ 2」日本語文法学会編『日本語文法事典』
- 吉田睦 2009 「会話内の質問表現が持つ多義性—応答表現からみる会話構築を中心に」『筑波応用言語学研究』16
- 渡辺実 1953 「叙述と陳述—述語文節の構造—」『国語学』13、14
- 渡辺実 1971 『国語構文論』塙書房

J.L.オースティン（著）／坂本百大（訳）1978『言語と行為』大修館書店

## 論文内容の要旨

本研究は、表現意図の点でも文型の点でも多様に広がる現代日本語の疑問文の実像を描きとり、日本語の実態に即した疑問文の規定を行うことを目的とするものである。文の内容的側面と言語行為的側面を明確に区別する立場から、特に質問表現に用いられる疑問文を対象に、両側面がどのように関係して疑問文を成立させているかを分析する。各章の内容は以下の通りである。

序章では、本研究の背景および立場を述べる。欧米言語のように平叙文と疑問文に統語構造の違いが見られない日本語において、様々な表現意図を持ち得る疑問文をひとつの文種として規定するのは難しい。そこで本研究では、内容的側面で話し手の「分からない」という感覚を表すことと、言語行為的側面で言われた相手が何らかの言語的反応を返さなければならぬ気になることが疑問文全体の共通点であることを踏まえ、両者の緊密な関係のあり方に疑問文という文の種類の実在意義を見出すことを目指す。

第1章では、本研究の記述・分析を行う前に、これまで日本語学の分野で疑問文・疑問表現の研究がどのようになされ、何が明らかにされてきたかを確認する。疑問文とは何かという原理的な問題に対して表現論、陳述論・モダリティ論、文法論など様々な立場の論者たちが行ってきた説明を検討し、今後の課題として、(1)「問い」概念の精密化、(2)非質問表現の扱いの明確化、(3)文の4分類への意識の回復の3点を挙げる。これに加えて、構成要素の研究、文型の研究についても概観する。

第2章および第3章では、本研究の前提となる基礎的整理として、まずは言語行為的側面にのみ光を当てて日本語疑問文の全体像を把握する。このうち第2章では、疑問文が言語行為的側面で相手から何らかの言語的反応を引き出すという共通点を持つことを踏まえ、どのような言語的反応をどのようなやり方で引き出すかという観点から現代日本語の疑問文を8種に分類する。結果的に言語的反応が得られることと言語的反応を要求することとは別物であるという立場から、言語的反応の引き出し方に要求・誘発・期待の別を見出すとともに、いわゆる質問によって得られる言語的反応に不明項特定・判定・応諾反応の3種があることを明らかにする。Yes/No 疑問文に対する答えに判定と応諾反応の2種があり、前者はWh 疑問文に対する答えである不明項特定とともに解答として一括できるという主張は、前章で挙げた「問い」の精密化という課題に対する本研究の答えでもある。また、この章では疑問文の文型整理も行い、8種の疑問文を担う文型を網羅的に挙げることによって疑

問文の文型と「問い」としてのあり方との間に緩やかなつながりが見られることを明らかにする。

続く第 3 章では、終助詞付加の可否および終助詞付加による表現機能の変化のあり方という観点から、疑問文の言語行為的側面と文型の関係をさらに詳しく分析する。先行研究が解答要求疑問文に範囲を限定して分析してきた終助詞「ネ」「ナ」の付加による表現機能の変化について、本研究では全文型の疑問文を対象に「ネ」「ナ」の付加可能性および「ネ」「ナ」が付加した際の表現機能の変化のあり方を調査し、文型によって「ネ」「ナ」付加の可否が異なること、そして「ショウ」や「ダロウ」が参加する文型に「ネ」「ナ」が付加した場合の表現機能変化のあり方はその他の文型に「ネ」「ナ」が付加した際のそれと異なることを明らかにする。これにより、結果的に、前章で同じタイプの「問い」を担うとした疑問文型の中でも、「ショウ」「ダロウ」が参加する文型とそれ以外の文型とではそのタイプの「問い」を担うことになる論理が異なる可能性があることを示唆することになる。

第 4 章から第 6 章では、もっとも典型的な疑問文である解答要求疑問文（不明項特定要求疑問文および判定要求疑問文）の内容的側面と言語行為的側面について、「ノ」の有無による意味の違いを手がかりにして論じる。まず、第 4 章では「ノ」が参加する判定要求疑問文の表現の色合いを 5 種に整理し、その背後にあるノ有り判定要求疑問文の構造が〔主語＝事実〕と〔述語＝話し手の了解内容／想像内容〕の一致の承認留保であることを述べる。ノ有り疑問文ではこの内容的側面が形によって保証されているため、言語行為的側面にも直接的な影響を与え、事実を把握する相手と了解内容／想像内容を言語化する話し手とが対峙するような問い方をすることになる。

続く第 5 章では、「ノ」が参加しない判定要求疑問文が好んで用いられる質問場面を類型化し、共感表明・行為発案・知識活性化の場面で行われる代弁的質問では常にノ無し疑問文が好まれること、また対話を始める場面や話題を転換する場面で行われる対話先導型質問ではノ無し疑問文が好まれる場合が多いことを明らかにする。そうなる事情として、ノ無し疑問文は無標であるために判定要求疑問文が本来的に有する代弁性の維持・顕示が可能であることについても論じる。前章およびこの章で論じた内容から、判定要求疑問文が内容的側面では話し手の言語化した事態と事実との一致の承認留保という一貫した性格を持つ一方で、言語行為的側面では、相手の把握する事実を目指して問いかける「対峙型」のノ有り疑問文と、相手に同化してその発言を促すようはたらきかける「代弁型」のノ無し疑問文との違いが鮮明になると見ることができる。このように、言語行為的側面ではノ有り疑問文と

ノ無し疑問文とがそれぞれ独自の性格を有すると考えることによって初めて、両者の使い分けに(α)ノ有り疑問文が安定する、(β)ノ無し疑問文が自然である、(γ)どちらも使える、の3ケースが存在する事実を説明することが可能になる。

第6章では、本質的にノ有り疑問文とノ無し疑問文の違いがない不明項特定要求疑問文において例外的に両者の使い分けが発生する質問場面を洗い出す。これらの質問場面を精査すれば、不明項特定要求疑問文においても相手の把握する事実への意識が高い場面ではノ有り疑問文が求められ、相手の発言を先回りして言語化することが習慣化した場面ではノ無し疑問文が好んで用いられることが分かる。したがって、判定要求疑問文だけでなく不明項特定要求疑問文も含めた解答要求疑問文全体について、その内容的側面での一貫性に反して言語行為的側面では対峙型の問いと代弁型の問いを場面に応じて使い分けしているとまとめることができるのである。

第7章から第9章では、意志をめぐるYes/No疑問文が相手の応諾反応を引き出すという解答要求疑問文とは異なるタイプの質問表現(応諾反応要求疑問文)について、内容的側面と言語行為的側面の関係を考察する。まず第7章では、現代日本語の意志形述語疑問文2種—シヨウカ疑問文とスル(カ)疑問文—に着目し、終助詞「カ」の必須性の違いを手がかりに、応諾反応要求表現の中でも両者の実現する表現領域が異なることを説明する。すなわち、「カ」によって話し手の不確定感覚を明示しなければ質問文たり得ないシヨウカ疑問文は独言型質問文の典型であるのに対し、「カ」で話し手の不確定感覚を明示すればむしろ質問文としては不自然になることの多いスル(カ)疑問文は対話型質問文の典型であると考えれば、前者が1人称主語・1人称複数主語領域に表現を偏らせるのに対し、後者が主語の人称に関係なく応諾反応要求表現を実現することが説明できる。

第8章および第9章では、意志をめぐるYes/No疑問文による応諾反応要求表現が現代日本語に特有のものであることを史的調査や外国語との比較調査から確認する。まず第8章では、中古・中世末期・近世前期(上方語)・近世後期(上方語・江戸語)の話し言葉資料を対象に、各時代の意志形述語疑問文がどのような言語行為を実現するか調査する。その結果、中古の意志形述語疑問文には見られなかった1人称主語・1人称複数主語領域の応諾反応要求表現のうち、申し出や相談など1人称主語領域の表現は中世末期に成立した「一ウカ」文型によって実現されるようになるものの、誘いや提案など1人称複数主語領域の表現が安定的に見られるようになるのは近世後期江戸語に至ってであることが分かる。

第9章では、日本語小説における応諾反応要求疑問文と英訳作品における対応表現とを

比較し、英訳作品の対応表現は平叙文あるいは 2 人称主語の疑問文であることが多く、話し手の意志をめぐる疑問文を質問に用いて相手の意向を引き出すタイプの言語行為は日本語に特徴的なものであることを明らかにする。これは、高度に対話的な場面でも独言的な言い方を好むという日本語の表現指向にも一致する。

以上の議論を踏まえ、終章では日本語の実態に即した疑問文の規定を行う。現代日本語の疑問文は「述べない」ことによって話し手の「分からない」感覚を表すという内容的側面に支えられ、相手から何らかの言語的反応を引き出す力を持つ文である。その内実は様々であり、本研究で詳細に検討した解答要求疑問文と応諾反応要求疑問文に限ってみても内容的側面と言語行為的側面の交渉のあり方は異なる。しかしながら、「ノ」「カ」の有無や述語形式など統語構造の違いが、文の内容的側面でのあり方を媒介にして、対峙型か代弁型か、あるいは独言型か対話型かといったコミュニケーションのあり方を左右する点に、疑問文という文の種類以外の文種との異質性を見ることができる。このように、話し手の感情や思惑など、人が他者や物事に接して生きていく上で避けられない生々しさと文の文法的なあり方の関係を論じた本研究は、新たなタイプの「話し手」像に基づく研究の一例として日本語文法研究に貢献するものと考えられる。